

書評と紹介

延原時行著

『対話論神学の地平』

——私の巡礼のなかから——

春風社 二〇〇六年九月二五日刊

A5判 ix+三三七+xx頁 四二八六円+税

保 呂 篤 彦

はじめに

本書の著者は、滝沢克己とジョン・B・カブ・jr.とに師事し、諸宗教間の対話、とりわけプロテスタント・キリスト教の立場から行われる仏教（およびその伝統に立つと考えられる西田幾多郎の哲学）との対話に基づいて自らの哲学と神学を展開し、日本のみならず長年欧米においても活躍してきた、この分野で日本を代表する研究者の一人である。本書は、その著者が研究者として活躍し始める遙か以前、同志社大学神学部の学生であった頃に記した文書から、ごく最近の作品に至るまでを幅広く採録し、「はしがき」「エピローグ」「あとがき」という三つの書き下ろしを加えて纏めた一種の論集である。まず最初に本書の目次を掲げて、その全体を概観しておきたい。

はしがき

プロローグ——入信から対話論神学まで

巡礼Ⅰ 実存の深淵から

第一章 ヨブに関する若干の詩的断片

第二章 『罪と罰』における思想の機能について

巡礼Ⅱ イエスとの出会い——関係性のあけぼの

第三章 「関係の絶対性」とは何か

——「マチウ書試論」からの出発

第四章 ボンヘッファーにおける倫理の基底の探究

巡礼Ⅲ 対話論神学の地平

第五章 イエスの対話論宣教学

——マタイによる福音書一五章二一—二八節

第六章 対話論神学の方法——ティリツヒを超えて

第七章 在家キリスト教提唱——我が巡礼の原視点から

第八章 在家基督教教程

第九章 基督心経

巡礼Ⅳ 地平を超えて「すべての道で主を認めよ」

第一〇章 キリスト教信仰の逆転

第十一章 ペトロとユダ

第十二章 ジャックリン・ケネディ・オナシス

第十三章 ルターの宗教改革の意義——新しき神の義の発見

第十四章 良寛とキリスト、良寛とパウロ

——絶望即感謝のいのち

第十五章 二一世紀の宇宙論的キリスト教——三つの呻き

第十六章 我が心の歌

エピローグ——芭蕉の「古池」の俳諧味と私の対話論神学の巡

礼

巻末付論 「非仏非魔」の立場と至誠心の神学

あとがき

索引

本書のスタイル、目的、構成

本書に収められた諸文書は、その執筆時期において最長で五〇年近い差があり、本書は、著者のこれまでの全生涯の思索の軌跡を示していると言えるであろう。

それにともなつて、それぞれの文書の形式も、取り扱っている対象や内容も、実に多様である。第二章から第七章までは、その扱う内容は多様であるものの、形式的にはいずれも一応学術論文のスタイルを取っている。しかしながら、例えば、第一章は、著者が経験した実家の焼失という不幸な出来事による衝撃を契機にして生じた神体験（「インマヌエル」の体験）からほとばしり出た思索を「書きなぐった」（三六四頁）文字通りの「詩的断片」であり、学術論文の形式を取っていない。また、第一〇章から第十六章までの七章は著者が勤務する敬和学園大学において宗教主任としてチャペルで行った小説教であり、これらもまた当然学術論文のスタイルを取っていない。例えば、そのうちの第一六章は、著者自身の作詞作曲になる「夕べの祈り」という楽曲を楽譜付きで収めている。さらにまた、第八章、第九章は著者の提唱する「在家キリスト教」あるいは「仏教的キリスト教」（「仏教の空観を摂取しつつキリスト教的信仰を堅持する底のキリスト教」⁽¹⁾）の勤行という実践に供される文書（式文、経など）の提示を意図するものであり、これもまた、やはり通常の意味の学術論文のスタイルを取るもので

はない。

しかしながら、本書は、目次からも見て取れるように、多様な文書をただ年代順に並べただけのものではない（確かにほぼ年代順に並べられてはいるけれども）。むしろ、それは、さらに多くの論考の中から特定の論考を選び出し、それらを明確な意図の下で編集したものであつて、全体として極めて緊密な纏まりをもった一冊の論考たることを目指している。

その特定の目的ないし意図とは、著者によれば、著者独自の「キリスト教弁証論」を書くことである（二頁）。そして、それが同時に、著者自身が、自らの人生の軌跡を跡づけるという営みと重なっている。言うなれば、著者とキリスト教との関わり（これを著者は「キリスト教と私」の「と」の不思議）とも呼んでいる（例えば、二九頁）の軌跡が、同時に独自の「キリスト教弁証論」を構成すると理解されているのである。

このような軌跡ないし「巡礼」（それはまた同時に著者独自の「キリスト教弁証論」を構成するのであるが）は、四つの段階ないし領域からなるものとして提示される。すなわち、まず、「巡礼Ⅰ」は、上記の神体験、「実存の深淵における神の共在」の経験、あるいは「主観的には、「神なき悲惨」の真只中にある人も、客観的Ⅱ実在的には、「神我らと共に在す」原事実の祝福に抱かれてしか存在しない」という「二〇代のはじめに火事のなかで知りえた「中略」悦ばしい実存把握」（一〇頁）である。そして次に、著者の言葉を用いるならば、「ここから巡礼Ⅰは瞬発し、そしてイエスに出会う巡礼Ⅱに至る」（同）のであつて、「決してその逆ではない」（同）。さらに、

書評と紹介

このように「神我らと共に在す」という「インマヌエルの原事実」がイエスとの出会いに先立っていることによって、イエス自身のうちに本来存する「対話論的宣教学」を契機として、「巡礼Ⅱ」が「巡礼Ⅲ」へと移りゆき、「一切の他者の思想と宗教」に対する「対話論神学が展開する」(一一頁)ことになる。そして、この「巡礼Ⅲ」において、日本人である著者は、仏教や西田哲学との対話に基づき、「仏教的キリスト教」に他ならない「在家キリスト教」を掘り当て(二一七頁)、その「基督心経」の勤行へと読者を誘う。またさらに、「この勤行のなかでどこどこまでも沈潜し、キリストと私の「と」の不思議Ⅱ「と」の神秘「中略」を聞くならば、一転、それを「屋根の上で大声で叫ぶ」(マタイ一〇・二七)宣教的告白の業、巡礼Ⅳ、に勇躍赴くこと」(一一頁)になると、著者は主張している。

「キリスト教弁証論のニュー・パラダイム」

さて、このように展開される本書の意義の一つは、本書によって提示されている学問のあり方にあると言つてよからう。

まず、著者は、このような構成をもって展開される自らの学問を、ジョン・ヒックが「問題学 (problematics)」ないし「問題学的神学」と名づけている学問と同様の立場に立つものと規定している。ヒックによれば、「受け継がれてきている伝統を研究し、これを保持する」「教義学 (dogmatics)」ないし「教義学的神学」に対して、「伝統と世界——世俗的世界と広範な宗教的世界との双方を含む——の間の接触領域で生じ、新

しい状況に照らして新しい神学を生み出すことに関与する」の「問題学」であり、前者が「その基本的立場を最終的真理の表明ととるのに対して」、後者は「その結論を仮説とみる」という²⁾。本書の著者にとつてもまた、伝統と世界との接触領域における新しい状況との関わりのなかでキリスト教の真理を見直すことが重要な仕事になるが、彼は、その際の新しい状況が、ティリツヒの場合のように単なる問いではなく、それ自体が独自の答えであるような他宗教(とりわけ仏教)の真理主張であることを、特に第六章前半において強調している(一九二頁参照)。また、このような二種類の神学が現実には対立し合っているとしても、本来互いに相手を必要とすることを認めている点においても、著者はヒックと一致している。ただ、著者の場合、ヒックにおいて「問題学的神学」と呼ばれている立場が、「在家キリスト教」と「宗教間対話の学理的宣明を主軸にする大学キリスト教」との二者に区分されており、それら二つに、さらにヒックの述べる「教義学的神学」に相当する「在来」の「教団」キリスト教を加えた「キリスト教の三形態の有機的錯合」が求められている(二三八頁)点で、ヒックとは相違するのではあるが。

ところが、この相違は、ヒックの論じた「問題学的神学」を超える学問のあり方を本書が呈示していることを示唆してもいい。すでに見たように、「巡礼Ⅲ」の後半(第八章と第九章)は、仏教との対話に基づく理論的成果から導き出された宗教的実践のための教程や式文、念仏の提示であり、さらに「巡礼Ⅳ」はこの理論と実践とを経て行われる「宣教」であるが、こ

これらの四段階ないし四領域をすべて含むことによって初めて著者独自の「キリスト教弁証論」が「学理的追究」(三六七頁)として確立すると主張されるからである。つまり、「対話論神学の地平」(「巡礼III」)とその背景(「巡礼I」および「巡礼II」)、さらにそこから発展する「宣教」(「巡礼IV」)をも含めた本書の全体が、仏教との対話に基づいてこれまで著者が構築してきた具体的に理論的な「対話論神学」そのもの(おそらくヒックの「問題学」に対応するもの)と同様の構造をもちつつ、いつそう深くかつ実践的な学を構成するとされており、それが「新しいキリスト教弁証論のパラダイム(範型)」(「四つの巡礼からなる私のキリスト教弁証論のニュー・パラダイム」(八頁)と呼ばれるのである。このことはまた、著者が、この巡礼の記録である本書について、それが単にキリスト教に関する著者の巡礼ではなく、「むしろ、「キリスト教と私」の、「その」との不思議Ⅱ「と」の神秘のおのずからなる遍歴Ⅱ活動の考察」(二九頁)であることを幾度となく断っていることに通じている。

諸宗教の神学に対する貢献

上述のように、著者は本書全体を一つの「キリスト教弁証論」として構想しているが、その中心となるのは、やはり「巡礼III」である。このことは「巡礼III」のタイトルが本書のタイトルと同じ「対話論神学の地平」であることから見て取れる。著者自身は、その中でも特に、新たなキリスト教の実践的なあり方を呈示している第八章と第九章こそが、本書の「へ転

轍点」であり、本書の中心であると主張している(二七二頁)。この二つの章に語られているキリスト教の実践(「生活と信仰との対話」、「在家キリスト教」)こそが、著者独自の「キリスト教弁証論」全体の基礎・要であり、その前に展開されている三段階の理論的考察(「巡礼I」の「実存の深淵」における「インマヌエルの原事実」への目覚め、「巡礼II」の「イエスとの出会い」、そして「巡礼III」第五章から第七章の「諸宗教との対話」に基づく組織神学的論述)と、その後展開される「巡礼IV」の「宣教」、その両方の基礎だと言うのである。

しかし、それにもかかわらず、本書のもつ最大の意義は、やはり第六章と第七章における議論が、これまでの学界の「諸宗教の神学」に対して行っている貢献であると言っても間違いないであろう。この二つの章において著者は、主として滝沢克己の神学に依拠しつつ、ヒックが主唱してきた「多元主義」ないし「神中心主義」の主張の正当性を、「包摂(包括)主義」に対して主張しながらも、反対にその不十分さの根拠をも明確に指摘している。

すなわち、著者は、「神中心主義」のもつ「普遍志向性そのもの」の正当性を、「包摂(包括)主義」、「キリスト教中心主義」から擁護しつつ、「神の言のイエスにおける、またイエスとしての、自己表現という独自の(後期西田哲学で言う)「逆限定」的消息「中略」をとらえそこねているという点」(二〇五頁)、「普遍そのもの(彼ら「多元主義者」の言う「神」)がただちに一々の個物個人と一体であると(西田の「絶対無の場所的限定、絶対矛盾的自己同一」や滝沢の「神人一体、インマヌエル

書評と紹介

の原事実」の言挙げにおけるように)ただ一息に言い切ることができない、このどこか中空に浮いた思惟の抽象性」(二〇五―二〇六頁)という点で、「多元主義」と「神中心主義」を批判するのである。イエスが「神の受肉」であるというのは神話的な言語使用であるとヒックが述べる時、ヒックの理論の神学的意義と妥当性は、それによって意味されていることが何であるかにかかっている。イエスが「神との接点」であることは、ヒックも認めており、彼はただそれが唯一の「接点」であることを否定しているにすぎない。しかし、ヒックにおいては、イエスが「神との接点」であるということの意味に関する考察が神学的に不十分であると著者は指摘し、その根拠の解明に努めているのであるが、この議論の重要性を看過することはできないであろう。

若干のコメント

最後に、評者が疑問をもった点について若干のコメントを加えておきたい。

(1) まず、本書における「対話」概念の多義性についてである。本書における「対話論神学」の「対話」は、主として「諸宗教間の対話」を意味していると言ってよからう。「対話論神学」とは、第一義的に諸宗教間対話に基礎づけられた神学であり、その「地平」とはその「構想に関わる意識のひろがり」を意味する(六頁)。ところが、本書は、この意味に限定されないさまざまな「対話」にもまた、その論述と深い関係をもつものとして言及している。たとえば、「過去の私」との

「対話論的折衝」を抜きにしては「対話論神学」もないと言われている(八頁)し、「対話論神学」の「実践的・組織論的展開である」第八章「在家基督教教程」、第九章「基督心経」においては、「対話は「中略」ついに「在家」と「キリスト」の対話」(四六頁)になると述べられ、さらに、これは「信仰と生活の対話」という「もつとも根底的な意味での「人間における対話」」(二四一頁)とも言い換えられている。さらに著者は、先に触れたことと関連するが、ヒックの言葉を借りつつ、自らの立場をも含む「実験主義」のキリスト教と、「保守派・福音派」のキリスト教という、キリスト教の二つの立場の間の「対話」の重要性にも言及している(二二八頁)。

しかしながら、「対話論神学」自体も、また、その「地平」を含む本書の全体が構成している「キリスト教弁証論のニュー・パラダイム」も、これらの「対話」を焦点にして論じてはいないため、それぞれの「対話」と「対話論神学」および「キリスト教弁証論のニュー・パラダイム」との関係が十分明確にはなっていない。「対話論神学」と諸々の「対話」概念との関係について、著者にはさらなる説明を求めたい。

(2) すでに触れたことであるが、著者は、第八章と第九章とを本書の「転換点」であるとし、ここに前半のすべてが収斂し、そこから「後者は前者の成果をすべて含んで進む」のであり、「前七章と後七章はたんにシンメトリカルではない」(二七二頁)と述べながらも、後半の七章それぞれについて、それが前半の七章のいずれかとの間に有する対応を簡単に説明している。しかし、これだけでは、両者のこの関連の必然性が十分

明らかではないように思われる。著者は、実に多様な文書を一冊の学術書にまとめ上げ、自らのキリスト者としてのこれまでの人生を統一的に理解するために、本書に極めて強く体系性を求め、各文書間に緊密な関連をもたせようと努めているが、果たしてそれにどれだけ成功しているのか、またそれがどこまで必要であるのか、評者には疑問である。

(3) さらに、これもすでに述べたことであるが、本書は「対話論神学」そのものを扱うというよりも、その「背景」やその「地平」に加え、それを超える「宣教」に至るまでを含む全体を著者独自の「キリスト教弁証論」という一つの学、「学理的追究」として提示することを目指しており、そこに本書のもつ意義の一つがあると評者もまた考える。しかし、そうであるからこそ、知的・理論的な「対話論神学」(あるいは著者自身の「諸宗教の神学」と、それを超えて構想されている「キリスト教弁証論のニュー・パラダイム」との関係(両者は対応する構造を有するであろう)をいかに理解するべきであるかということについて、さらに詳細な説明が同時に必要であると思われる。

なお、気がついた限りではあるが、誤植を指摘しておく。四八頁三行目の「であるわけなのである。」という部分は、本来削除すべき字句が残ってしまったものであろう。また、二一五頁三行目の「個人史の開陳と自己の神学的方法」は、「個人史の開陳を自己の神学的方法」の誤りであろう(傍点はいずれも評者による)。

おわりに

さて、右に評者の疑問を列挙したが、本書は、著者の学識の広さと思案の深さを反映して浩瀚かつ内容豊富であるため、明らかに評者の能力を超える部分を多く含んでおり、列挙した疑問が評者の理解の不十分さや不確かさに由来するものでないと言ふ自信はない。また、同様の理由により、本書評が本書本来の主張やその意義を十分に伝えることができていないことを評者もまた自覚している。著者と読者のご寛恕を乞いたい。

いずれにしても、現在なお膠着状態のまま放置されている観のある、諸宗教の神学および宗教哲学における「多元主義」と「包摂(包括)主義」とに関する議論に対して、第六章、第七章を中心にして本書が大いに貢献するものであることは間違いない。ジョン・ヒックらが中心になって展開してきた「宗教多元主義」がもつ魅力とその神学的主張の意義とを性急に否定し去るのではなく、むしろ高く評価しつつ、同時にその不十分さの根拠を指摘する著者の洞察は重要である。本書を十分に考慮に入れた上で、先の問題に関する議論が日本の宗教哲学の分野においても、今後さらに活発に行われることを期待する。

注

(1) 延原時行『仏教的キリスト教の真理——信心決定の新時代に向けて』行路社、一九八七年、七〇頁。

(2) ジョン・ヒック(間瀬啓允訳)『神は多くの名前をもつ——新しい宗教多元論』岩波書店、一九八六年、二―三頁。